

令和元年度 学長戦略経費（公募型プロジェクト）研究成果概要報告書

経費の種類	<input type="checkbox"/> 共同研究推進 <input checked="" type="checkbox"/> 若手教員研究支援 <input type="checkbox"/> 個人研究支援 <input type="checkbox"/> 研究推進重点設備 <input type="checkbox"/> 研究推進設備修繕
プロジェクトの名称	「期待される人間像」の思想史的再検討—「人間の主体性」に着目して—
報告者氏名・所属・職名	山田真由美・札幌校・講師
プロジェクト担当者氏名・所属・職名	山田真由美・札幌校・講師
研究内容及び成果の概要	
<p>本研究は、1966年10月31日に中央教育審議会より答申された「期待される人間像」に着目し、戦後の教育政策におけるその位置づけを、思想史研究の側から問い直すことを目的とした。</p> <p>本研究が着目したのは、「期待される人間像」が、(1) 1960年代当時、人的能力の開発に急であった文部行政に対して、人間をただ経済成長に寄与する労働力とみなすのではなくて、人格として尊重すべきと提案したこと、(2) ひとりひとりの個人の「主体性の確立」を教育の基本的な課題としたうえで、「個人」「家庭人」「社会人」「国民」という四つの側面から人間像を提示したこと、の二点である。</p> <p>上の二点について、特別委員会で主査を務めた高坂正顕と、同じく委員であった天野貞祐の思想をもとに検証することで、戦後の教育政策における「期待される人間像」の新たな位置づけを検討した。</p> <p>本研究期間を通して明らかになったのは、次の二点である。</p> <p>(1) 「期待される人間像」の土台となった人間観を、高坂の著書『私見期待される人間像』（1966年）に検証し、それが主として実存主義の「本来の自己」の概念にもとづいていることが明らかにした。このことはこれまで「国家に従属する客体の形成を意図するものである」と考えられてきた「期待される人間像」の評価に再考を迫るものとなった。</p> <p>(2) 「期待される人間像」の第二部に示された「個人として、家庭人として、社会人として、国民として」という徳性の区分が、1953年に天野貞祐が発表した「国民実践要領」と同様であることに注目し、その背後に、ヘーゲルの人倫に関する思想と西田哲学の絶対矛盾的自己同一の思想が深く関連しているということを明らかにした。</p>	
成果の公表の状況	
【著書】	
【学術論文】日本道德教育学会2019年度春季大会（於麗澤大学）にて個人研究発表：「「期待される人間像」の再検討—人間の主体性に着目して」	
教育現場で活用可能な分野・教材等	
道德教育の理論的背景について	
配布又はダウンロード可能な資料	
問合わせ先	代表者： 山田真由美 電 話： FAX : mail : yamada.mayumi@s.hokkyodai.ac.jp